様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	特別支援教育専攻 ／島田　恭仁

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

①学部：　コア科目（実践基礎演習・特別支援教育実践Ⅰ・特別支援教育実践Ⅱ）を通じて，特別支援学校や特別支援学級の現場の雰囲気をつかませた上で，専修専門科目として「知的障害者の心理」「重複・LD等の特性」を講義してきた。本年度は現場に入って実践研究を行うことを，卒業研究につなげてゆくことにより，理論と実践のリンクをより一層深化させることにしたい。
②大学院：　コア科目（教育実践フィールド研究）を通じて，特別支援学校や特別支援学級の現場の雰囲気をつかませながら，それと併行して，専門科目である「特別支援教育学習心理学研究論」「特別支援教育学習支援演習」を講義してきた。本年度は現場に入って実践研究を行うことを，修士論文につなげてゆくことにより，理論知と実践知をより一層深化させ，教師の専門性の向上に寄与したい。

2．点検・評価

①　ゼミナールの学部生に，小学校の特別支援学級において知的障害児の指導を行う事例研究の機会を提供した。指導は順調に進み，授業を通じて涵養した知識と，事例研究を通じて得たデータに基づいて，優れた卒業論文を完成することができた。具体的には，知的障害のある児童に適した教材作成と個別指導の実践を行い，理論と実践のリンクをより一層深化させることに役立った。

②　ゼミナールの院生に，小学校の通常学級に在籍する特別なニーズをもつ児童に対して通級指導を行う事例研究の機会を提供した。指導は順調に進み，授業を通じて涵養した理論的な知識と，事例研究を通じて得た実証的なデータに基づいて，優れた修士論文を完成することができた。具体的には，LDやアスペルガー障害のある児童に適した教材作成と個別指導の実践を行い，理論知と実践知を深化させ，教師としての専門性を向上させることに役立った。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①　学部の授業において知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養すると共に，学生に知的障害児・発達障害児のニーズに応じた実践的な指導を体験させ，卒業論文の作成につなげてゆく。
②　大学院の授業において知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養すると共に，院生に知的障害児・発達障害児のニーズに応じた実践的な指導を体験させ，修士論文の作成につなげてゆく。また，研究成果を何らかの形で公表することを奨励する。
③　学生及び院生に研究者としての自覚をもたせるため，学会参加を奨励して他大学の研究者と交流できる機会を提供したり，外国の教育関係者と交流できる機会を提供したりするように，配慮を行う。

２．点検・評価

① 学部の授業において，知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養することを目的として，「知的障害者の心理」「重複・LD等の特性」の講義を行った。授業中には，新しく開発された心理検査を紹介したり，近年話題にされている発達性ディスレクシアについて紹介したりして，卒業研究に役立つ知見を提供することができた。また，特にゼミ生には特別なニーズのある児童への支援を実地で体験させることができた。

② 大学院の授業において，知的障害や発達障害に関する専門的な知識を涵養することを目的として，「特別支援教育学習心理学研究論」の講義を行った。授業評価は「専門的知識を深めるのに役立つ内容であった」の項目において，多数の受講生が5の評定を行い，全体の評定平均値は4.7となった。従って，修士論文の作成につながる専門性を育成できた。また，特にゼミ生には特別なニーズのある児童への支援を実地で体験させることができた。

③ ゼミナールの院生を全国規模の学会に参加させ，他大学の研究者と交流できる機会を提供し，LDやADHD等の発達障害に関する研究者としての自覚をもたせることができた。また，学部生には，教員研修留学生と交流できる機会を提供し，国情の異なる国における特別支援教育の実態に関する知識をもたせ，国際的な動向に視野を広げることができた。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

① 医療機関においてADHDの診断を受けた児童に対して，詳細な心理学的アセスメントを実施する。そして，ADHDにおける読み書き障害の実態について検討し，ADHDとディスレクシアが合併する事例の認知特性を明らかにする。研究の成果を全国規模の学会において発表する。
② 医療機関において自閉症の診断を受けた児童に対して，詳細な心理学的アセスメントを実施する。そして，自閉症における読み書き障害の実態について検討し，自閉症とディスレクシアが合併する事例の認知特性を明らかにする。研究の成果を全国規模の学会において発表する。

２．点検・評価

① 自身で作成した文章音読課題と各種の心理検査を用いて，ADHD児における読み書き障害の実態についてアセスメントを実施し，事例の認知特性を明らかにした。その研究成果の概要を全国規模の学会において発表した。

② ディスレクシア（読み書き障害）のアセスメントに役立つ文章音読課題を作成し，小学校低学年における音読時間と誤読内容の規準を検証した。さらに，文章音読課題と各種の心理検査を用いて，自閉症における読み書き障害の実態についてアセスメントを実施し，事例の認知特性を明らかにした。その研究成果の概要を全国規模の学会において発表した。

③ 文章音読課題の作成過程，並びに，文章音読課題を用いた発達障害児のアセスメント過程について詳しく解析を行って，ディスレクシア（読み書き障害）の判断における文章音読課題の有効性について検討を加え，その詳細を紀要論文にまとめて投稿した。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

① 学内における各種委員会の委員として，本学の運営に参画する。
② 特別支援教育専攻の教育研究内容のより一層の拡充を図る。特に大学院のフィールド研究並びに各種の授業科目を通じて専攻の院生の指導を行い，特別支援教育の専門資格を取得する力量のある院生を養成する。

２．点検・評価

① 就職委員会の委員として就職支援行事に参画し，週末に実施される模擬個人面接と模擬集団面接において面接官を務め，試問に対する受け答え，面接時の態度，模擬授業の進め方等について，教採受験予定の学生・院生の指導を行った。

② 当専攻の院生が受講する教育実践フィールド研究に，特別支援教育の専門資格を取得するためのカリキュラムと発達障害児の教育現場での実習を取り入れ，専攻の教育研究内容のより一層の拡充を図った。さらに，専門資格を取得する院生（現職教員）の指導に当たり，力量のある教員の育成に努めた。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

① 附属特別支援学校や公立諸学校における研修会に協力し，特別なニーズを有する児童生徒に対する支援のあり方について検討する。また，当専攻主催の行事を通じて，教員のための研修機会を積極的に提供する。
② 県教委や市教委，あるいは教員や保護者と連携しながら，特別なニーズを有する児童生徒に対する支援活動を広範に展開する。具体的には，コンサルテーションを通じた間接的な支援やアセスメントと指導を通じた直接的な支援を行う。

2．点検・評価

① 市が主催する小・中学校通級指導教室担当者研修会において講師を務め，特別なニーズを有する児童生徒（LD・ADHD・自閉症等）に対する支援のあり方について講習を行った。また，当専攻が主催するLD等通級指導教室支援事業（特別支援教育事例検討会）の計画立案と遂行を行い，現職教員のための研修機会を提供したところ，極めて多数の参加者を得た。

② 教育支援講師・アドバイザーの招請に応じて，特別なニーズを有する児童生徒に対する支援活動を広範に展開した。具体的には，3校の小学校を訪問し，特別なニーズを有する児童が参加する授業の参観を行った上で，管理職並びに教師に対して，児童のアセスメントと指導に関するコンサルテーションを行った。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

今年度は，ゼミナールの院生に，LD・ADHD・高機能自閉症等の児童に対して通級指導を行う機会を提供したり，教育実践フィールド研究を受講する院生に，特別支援教育の専門資格を取得するための機会を提供したりするなど，特別なニーズをもつ児童に対する対応策についての院生の理解を深めることができた。また，当専攻が主催する「LD等通級指導教室支援事業」において，県内の現職教員のための研修機会を提供したところ，極めて多数の参加者を得ることができ，大学での研究成果を教育現場に還元することができた。さらに，教員個人としても，特別なニーズをもつ児童に対するアセスメント方法についての研究を発展させることができ，さらに教育支援講師・アドバイザーのコンサルテーション活動を通して，個人の研究成果を教育現場に還元することができた。これらの諸点で，本学への総合的な貢献を行うことができたと言える。